

## サエ・マデ・デモ・ダツテの機能と構造

井島 正博

はじめに

井島(二〇〇五・一、三)では、副助詞の中でもその分析を試みたが、〈並列・添加〉ないし〈意外・極限〉の意味を表わす副助詞には、他にサエ・マデ・デモ・ダツテが存在する。そして、それらは共通のカテゴリとして括することができるほどであるから、機能に共通性が見られることは当然であるが、他方、相互に使い分けも見られる。本稿では、そのような相互関係を全体として見渡してみたい。

### 1 サエ・マデ・デモ・ダツテの共通点

サエ・マデ・デモ・ダツテおよびモには、直感的にも共通性を感じられる。実際、(1) a・bのように大抵のものが置き換え可能な場合がしばしば存在する。

- (1) a そんなことは、太郎(も／さえ／でさえ／\*まで／でも／だつて)できる。(丹羽(一九九五・一二)に加工)  
b この力士は力がある。好調なときは横綱(も／さえ／でさえ／まで／でも／だつて)投げ飛ばす。

(菊地(二〇〇三・一一)より)  
最初に、おおまかにこれらに共通する特徴を挙げてみると、まず、これらには他に同類のものがあることが含意されている。この特徴から、井島(一九九二・二)で論じたように、これらの形式を〈並列・添加〉系の副助詞と呼ぶことにしたい。さらにそれだけではなく、これらが下接した要素は、他の同類の要素に比べて、普通は同類であると認識されない、同類である可能性が低いものである。この特徴を、〈意外・極限〉と呼ぶことにしたい。

そこで、第1・1節、第1・2節では、これらの副助詞が持つ、〈並列・添加〉性、〈意外・極限〉性についてそれぞれ検討を加えたい。

1:1 〈並列・添加〉表現としての

サエ・マデ・デモ・ダツテ

サエ・マデ・デモ・ダツテはモと同じく、並列・添加系に属し、対比・限定系のハ・ダケ・バカリ・シカ（…ナイ）と対立していることは、井島（一九九二・二）で論じた（その後、野田（一九九五・五）も、「極限系」「限定系」と呼称は若干異なるが、ほぼ同様の体系を想定している）。しかしながら、サエ・マデ・デモ・ダツテが並列・添加系に属すようになるにあたっては、それぞれ異なつた事情があるように見受けられる。それが〈並列・添加〉形式となつたサエ・マデ・デモ・ダツテの機能の相違にも反映していると考えられるので、最初にこの点について簡単に見ておきたい。

サエは、現代語では並列・添加系とはいつても、ほとんどが〈意外・極限〉および仮定条件節内での〈最低条件〉の意味で用いられている。しかるに、上代・中古においては、典型的な〈添加〉の表現であつた。それが、中世・近世と、意味の拡大・特化を経て、現代語のような状態に至つた（そのありさまは鈴木（二〇〇五・三）に詳細に跡づけられている）。たとえば、(2) a・b では、破線部の事態に対して、サへ（現代語のサエ）を含む事態が〈添加〉されている。

(2) a 「昨日も昨日も今日も見づれども明日さへ」（左倍）見

まく欲しき君かも

『万葉集』巻六・一〇一四

b なげきつゝかへすころもの露けきにいとぞそらさへし  
ぐれそふらん

『蜻蛉日記』上 43・114

要するに、サエは歴史的に見ても、最初から〈添加〉の表現であつたわけである。

それに対して、マデは現代語においても、一方では特にある範囲の中での〈着点〉を表わす格助詞的用法を持ち、他方で〈並列・添加〉〈意外・極限〉あるいは〈程度〉〈比況〉のような意味を表わす副助詞的用法を持つている。これらの用法は決して同音異義語的に独立したものではなく、原理的に連続したものであると考えられる。ここでは、格助詞的用法から副助詞的用法へ拡張したものとして、その有様をシミュレートしてみたい。

まず、同じ〈着点〉とはいつても、現代語では、ニ・ヘ・マデの間には、およそ、ニは〈到達点〉(3) a、へは〈方向〉(3) b、マデは〈範囲〉(3) c を表わすものとして細分化されている。

(3) a 約束の時間の五分前に駅に／??へ／\*まで着いた。

(到達点)

b 太陽が昇る方角へ／?に／\*までまっすぐ歩いた。

(方向)

c 自宅から駅まで／\*に／\*へは自転車を通つてゐる。

(範囲)

さらに、マデが表わす〈範囲〉は、時間的にも空間的にも方向性を持つており、〈起点〉にカラが、〈着点〉にマデが下接し、しかも語順も〈起点〉が先で〈着点〉が後でなければならない。

(4) a 六月は月初めから月末まで雨が降り続いた。

(時間的範囲)

a<sub>1</sub>\* 六月は月初めまで月末から雨が降り続いた。

a<sub>2</sub>\* 六月は月末から月初めまで雨が降り続いた。

a<sub>3</sub>?? 六月は月末まで月初めから雨が降り続いた。

b 持久走でスタートラインからゴールまで歩いた。

(空間的範囲)

b<sub>1</sub>\* 持久走でスタートラインまでゴールから歩いた。

b<sub>2</sub>\* 持久走でゴールからスタートラインまで歩いた。

b<sub>3</sub>?? 持久走でゴールまでスタートラインから歩いた。

ただし、実際の移動を伴わない(5) a、b のような場合には、起点と着点とを入れ換え可能であるが(語順は入れ換えられない)、その場合にも認知言語学では、「心的走査 mental scanning」を行っていると言論じる。すなわち、心的に一方を起点とし、他方を着点とするその相違が表現に反映すると考えるわけである。

(5) a 東海道は江戸日本橋から京都まで走っている。

a\* 東海道は京都まで江戸日本橋から走っている。

b 東海道は京都から江戸日本橋まで走っている。

b\* 東海道は江戸日本橋まで京都から走っている。

さて、このようなマデの格助詞用法が、どのようにに副助詞用法に拡張していくのだろうか。

さて、これまで〈起点〉から〈着点〉までの〈範囲〉は連続したものであった。それに対して、(6) a、b、c は、これまでも同じような時間的(時系列的)範囲、空間的範囲、それから数的範囲を表わすが、連続的なものではなく、離散的なものである。

(6) a 伊藤博文から安倍晋三まで歴代総理大臣を暗誦した。

(時系列的範囲)

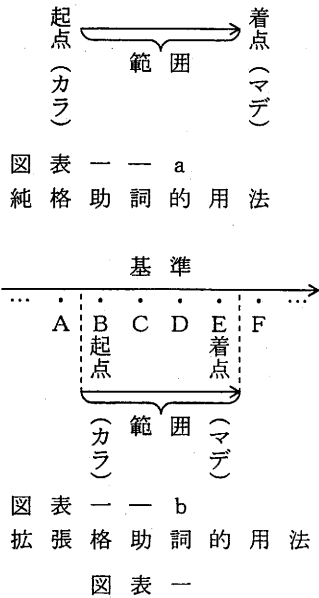
b 東京駅から高尾駅まで中央線の駅を数えあげた。

(空間的範囲)

c 午前中に受験番号一番から十番までを面接した。

(数的範囲)

離散的な要素をある範囲として了解するためには、何らかの一次的な基準・スケールが必要となる。それが(6) a、b、c では、時系列・(一次的)空間配置・数であったわけである(図表一)。



これらの用法は、「カラマデ」の形で「範囲」を表わしているという点で、また格助詞的用法にとどまるものである。しかしながら、他の要素（図中のB、C、D）に加えて当該要素（マデの下接したE）を提示するという点からも、一歩（添加）の用法に踏み込んでいとも了解できる。

また、たとえば移動のように、起点と着点が事態のあり方によってあらかじめ決まっていな場合、数字であれば小さい数字から大きい数字まで（(7) a・a）、視点者の近くから遠くまで（(7) b・b）というように、現われるべき順番はある程度前もって定まっている。

(7) a マラソン大会で、一位から四位まで独占した。

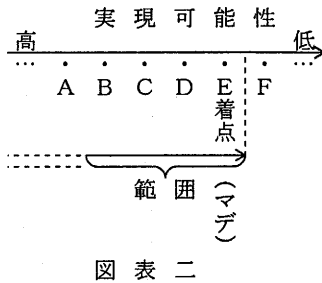
a マラソン大会で、四位から一位まで独占した。

b ここからあの山の麓まで、我が家の敷地だ。

b ??あの山の麓からここまで、我が家の敷地だ。

このような格助詞マデの用法は副助詞マデにも受け継がれていると考えられる。マデの格助詞的用法から副助詞的用法への移り変わりを示す特徴としては、まず第一に、〈意外・極限〉の意味を持つことであるが、それ以外にも、第二に、〈意外〉のモと承接してマデモの形をとることができること、第三に、起点（カラ）は必ずしも想定されていない。

マデが下接する項は格助詞的用法においても、（着点）すなわち何らかのスケール上での一方の極限値を表わしていた。そして、時系列や空間配置や数など、背後に明確なスケールが想定しにくい場合にもマデが用いられるようになる。スケールのデフォルト値として〈実現可能性〉といったものが充てられるようになり、マデの下接項は〈実現可能性〉の最低値の側に用いられる（〈実現可能性〉の高い方は起こって当然なのであるから、特に問題にされない）（図表二）。



デモは、次節で見るように、ニテナモないしニ十テナモに遡り、語源的に〈並列・添加〉のモを含んでいる。またダツテも、次節で見るように、ダトテに遡り、語源的には逆接仮定すなわち〈讓歩〉を表わす接続助詞であつた。逆接仮定条件文の中に〈並列・添加〉の構造が組み込まれていることは、井島（一九九三・三）で論じた。

以上のように、サエ・マデ・デモ・ダツテおよびモは、いづれも〈並列・添加〉表現の中に含めることができる。

## 1・2 〈意外・極限〉表現としての

サエ・マデ・デモ・ダツテ

### 1・2・1 〈意外・極限〉表現の成立の経緯

サエが〈意外・極限〉の機能を担うに至つた経緯は、井島（二〇〇五・一、〇五・三）で、モについて議論したように、〈並列・添加〉の機能と密接に関わっているものと思われる。すなわち、対比・限定系のハ・ダケ・バカリ・シカ（…ナイ）には〈意外・極限〉の用法はないが、並列・添加系のモ・サエ・マデ・デモには〈意外・極限〉の用法があることがその何よりの根拠となるだろう。特にサエは上代・中古には単純な〈添加〉の用法しか持たなかったのが、現代語では単純な

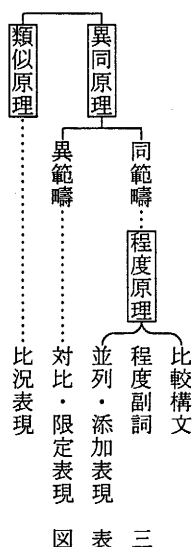
〈添加〉は少数となり、（仮定条件節における〈最低条件〉を除けば）大多数の用例が〈意外・極限〉に偏っている。〈並列・添加〉の機能が〈意外・極限〉に結び付く経緯を、ここに改めて辿り直しておきたい。

範例的な要素同士を対照する観点にはいくつかのものがあろう。一つは、それぞれの要素が何らかの異なつた範疇（属性、関係、特定の出来事への関与など）に属するか、同じ範疇に属すのか、という二者択一の観点で、これを「異同原理」と呼んでおきたい。もう一つは、何らかの基準を当てはめて要素同士がそのスケール上でどのあたりに位置するかという比較をもとにした観点で、これを「程度原理」と呼んでおきたい。さらに、要素同士が互いにどれくらい似ているかという観点も考えられるが、これは「類似原理」と呼んでおきたい。

ここで、それぞれの原理はそれぞれ特定の表現と結び付いているが、異同原理をもとにした表現が対比・限定表現と並列・添加表現とであり、同範疇である場合に、程度原理をもとにした表現が比較構文や程度副詞などであり、類似原理をもとにした表現が比況表現である。

さて、このうち異同原理と程度原理との間には階層関係がある。そもそも程度を比較するためにはそれらの要素の間に共通の基準が適用されなくてはならない。しかも、それらの要素はそのスケール上で、基準点を中心に同じ側に位置しな

ければならない。すなわち、異同原理が適用されて同範疇に分類されたものに対してはじめて程度原理が適用できるわけである（図表三）。



《意外・極限》の意味合いの背後には程度差という基準が不可欠なのであるから、異範疇であることを表わす対比・限定系の形式ではなく、同範疇であることを表わす並列・添加系の形式と結び付くことは以上の議論から明らかであろう。

しかしながら、《並列・添加》の機能が同範疇の要素間の程度差と結び付きやすいことはこれで説明がついたとしても、それが《意外・極限》という意味合いとなることについてはまだ充分に明らかになっていない。

要素間の背後に、明確に何らかのスケールが存在していない場合、デフォルト値として与えられるのが《実現可能性》というスケールであると思われる。そして《実現可能性》というスケールは現実存在するものというよりは、話し手の心の中での目算によるもの、すなわち期待世界に位置づけら

れると考えられる。

《実現可能性》のスケールには、大小があるだけではなく、ある方向性が存在する。それを矢印で示せば、根本側では《実現可能性》が大となり、先端側は小となる。このことは、マデで最も見やすい。ちなみに、格助詞の「カラ」マデは、背後に何らかのスケールおよび方向性が認められる場合に用いられた。たとえば、時間的には《以前》カラ《以後》マデ、空間的には移動のときは《出発点》カラ《到着点》マデ、非移動のときは視点者の《近傍》カラ《遠方》マデ、数量は《少量》カラ《多数量》マデのように用いられた。それに対して、背後には前もって特にスケールも方向性も認められない場合に、《実現可能性》のスケールと方向性が当てはめられたものが、副助詞の（「カラ」）マデであると考えられる。ここで注意を要するのは、まず、副助詞としての用法の場合には、必ずしも「カラ」が現われないわけではないこと（(8) a、b）、そして、とりあえずここで便宜的に格助詞用法と副助詞用法とを分けたが、両者が重なる場合もありうることである。たとえば、空間的《遠方》の方が《実現可能性》が低くなるというような場合も決して少なくはない（(8) c）。

(8) a 今場所の朝青龍は、前頭から横綱まで向かうところ敵なしの活躍だ。

a ??今場所の朝青龍は、横綱から前頭まで向かうところ敵なしの活躍だ。

b 失業問題には、(一般庶民から) 総理大臣まで頭を悩ませている。

b ?? 失業問題には、(総理大臣から) 一般庶民まで頭を悩ませている。

c 子供のくせに太郎はあんな所まで石を投げることできる。  
(沼田(一九八六・四))

要するに、副助詞マデで示された要素は、実際に〈実現可能性〉が最も低いと判断されているわけであるから、その要素に関して当該内容が実現しているという事実は、〈意外性〉を表わし、当該内容が実現される〈極限〉であると了解されることになる。

マデで示された要素よりも〈実現可能性〉の高い要素に対しては、当該内容が実現しているかどうかという点に関しては、(9) a・bのように文脈上それに反する言及がない場合には、語用論的に含意していると考えられる。

(9) a 今場所の朝青龍は、前頭から横綱まで向かうところ敵なしの活躍なのに、白鵬にはどうしても勝てない。

b 失業問題には、一般庶民から総理大臣まで頭を悩ませているのに、労働大臣はあまり関心がない。

このような〈意外・極限〉のマデは、早くも中古には見出され、〈実現可能性〉が最低のものに用いられる点は、現代語と変わりないが、起点(ヨリハジメ)、範囲(カギリ)が共起することが多く、現代語よりも格助詞との連続性が顕著

である。

(10) a 君(源氏)、聖よりはじめ、読経しつる法師の布施ども、まうけの物ども、さまざまに取りに遣はしたりければ、そのわたりの山がつまで、さるべき物ども賜ひ、御読経などして出でたまふ。  
『源氏物語』若紫 一・296

b (源氏が) 六十巻といふ書読みたまひ、おぼつかなき所どころ解かせなどしておはしますを、山寺には、いみじき光行ひ出だしたてまつれりと、仏の御面目ありと、あやしの法師ばらまでするこびあへり。

c (源氏は) あるべきかぎり、上下の僧ども、そのわたりの山がつまで物賜ひ、尊きことの限りを尽くして出でたまふ。  
『源氏物語』賢木 二・113

d 御禊の日、上達部など数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに、容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋、馬、鞍までみなととのへたり、とりわきたる宣旨にて、大将の君(源氏)も仕うまつりたまふ。

e (藤壺は) ただもとよりの財物、えたまふべき年官、<sup>かうかり</sup>年爵、御封<sup>みか</sup>のもの、さるべき限りして、まことに心深き事<sup>こと</sup>ものかぎりをしおかせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで(藤壺の薨去を) 惜しみきこゆ。

『源氏物語』薄雲 二・438

同様に、サエにも、その背後には方向性を持った〈実現可能性〉のスケールが想定されるものと思われるが、そのありさまをもう少し立ち入って検討したい。

古典語において、サへの本来の〈添加〉という働きは、必ずしも〈実現可能性〉と結びついてはいなかったと思われる。

(11) a & c の場合、複数の要素あるいは事態が並べられているのは、サへが付加した要素が〈実現可能性〉が最も低いというわけではないことを意味しているだろう。しかし一方、(11) b・c のように、モとサへとが並べられた場合、サへが最後に現われる点は、その〈並列〉とは若干異なつて、まさに〈添加〉と言われるゆえんであるが、「そのうえ・ついでに・おまけに・最後に」といった意味合いを表わしているものと思われる。

(11) a 橘は実さへ花さへその葉さへ(実左倍花左倍其葉左倍) 枝に霜降れどいや常葉の木 『万葉集』巻六・一〇〇九

b 一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ(明日左倍) 見まく欲しき君かも 『万葉集』巻六・一〇一四

c …若かりし肌も皺みぬ黒かりし髪も白けぬゆなゆなは 息さへ絶えて(氣左倍絶而) 後遂に命死にける水江の浦 島子が家所見ゆ 『万葉集』巻九・一七四〇

他の事態が成立し、それに加えて当該事態が成立するといふことは、当該事態が他の事態に比べて〈実現可能性〉が低いという認識に結びつきやすいだろう。このことは、先に見

たように、異同原理が働いて同範疇に振り分けられたものは、同範疇の中での相違として程度差を見出そうとする、程度原理が適用されやすい、という一般原則がここに働いているのだろう。

古典語の展開の中で、サへの〈意外・極限〉の用法は、鈴木(二〇〇五・三)の調査によれば、中世からちらほら現われるようである。

(12) a 恩愛の道深ければ、いかなる鳥獸さへも子を思ふ心浅からず。いはんや人倫においてをや。いはんや一子においてをや。 『太平記』巻三四・438

b いとさかりとみゆるさくらなたゝ一木あるもこれさへ 見すてかたきに 『とはずがたり』巻一四・1才

その経緯をもう少し丁寧にたどつてみたい。ただし、現代語のサエには〈添加〉の用法は稀になつていたので、井島(二〇〇五・一、三)で議論した、その〈單純他者肯定〉から〈意外〉への展開のありさまを簡単に振り返つてみたい。基本的には、モが表わす〈並列〉という機能は、(13) a のように「太郎が来た」とことと「次郎が来た」とことを対等なものとして提示することである。しかるに、対等に並べられる事態の間に〈実現可能性〉の程度差というスケールがある場合がある。

(13) b では、「課長がぺこぺこする」こと、「部長がぺこぺこする」こと、「専務がぺこぺこする」こと、「社長がぺこぺこする」こととの間には、この順に〈実現可能性〉が低くなつてい



く。(13) a も、一方の事態の「実現可能性」を低くすれば、(13) c のように二つの事態の間に「実現可能性」の程度差が生じることになる。すなわち、(13) b・c のモは「意外」のモということになる。

(13) a 太郎(が／も)来た。次郎も来た。

b あの先生には、課長も、部長も、専務も、社長も「ペ」こする。

c 太郎(が／も)来た。いつもは来ない次郎も来た。

このように、「並列・添加」系の副助詞であれば、そこに「実現可能性」の程度差が重なれば、容易に「意外」の用法に展開するものと考えられる。そのように事態を対等に扱う「並列」にもそのような過程が生じるわけであるが、サエのように他の事態に当該事態を付け加える「添加」の場合は、当該事態だけが発生することから「意外」という含意が生じるといふよりも、他の事態に加えて当該事態が発生すること全体が「意外」であるという含意は、最初から生じやすい素地があったのではないだろうか。他の事態に加えて当該事態が発生することが「意外」であるという意味から、当該事態の発生のみでも「意外」であるという意味に展開することも自然であるように思われる。

デモについては、デモの歴史的な前身は、デの前身がニテであることからしても、ニテモであることは明らかであろうが、現代語の副助詞のデモが一語化していると言われるのに

対して、古典語のニテモはニテ+モないし二十テ+モのように分析されることは言うまでもないだろう。さて、ニセヨ・ニシロ・デアツテモ・ニシテモ、あるいはデモと訳すことのできる、いわゆる「譲歩」のニテモは、少なくとも中古に遡る。

(14) a 左馬頭「…時々<sup>に</sup>にても、さる所にて忘れぬよすがと申う

たまへんには、頼もしげなく、さし過ぐいたり心おかれて、…」 『源氏物語』帚木 一・156

(ときたまに<sup>も</sup>せよ、通つて行く相手として、忘れぬ連れ合いと考えようとすると、それでは、頼りにならず、行き過ぎているな、と用心する気になりまして、…)

b もしは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、いやしきにても、なほこの御あたりにさぶらはせんと思ひよらぬはなかりけり。 同 夕顔 一・223

(あるいは、まんざらでもない妹などをもっている人は、卑しい地位でもいい、やはり君のおそばにお仕えさせたいと、いう気にならぬものはなかった。)

c (源氏は)かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもかしさもめづらかなり。 同 須磨 二・178

(ほんの一時のお出かけに<sup>しろ</sup>、このような旅の経験はまだおありでなかったから、心細さも、また風情の程も初めてのよう感じられる。)

d 兼の上「我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさび

にても心を分けたまひけむよ」とただならず思ひつづけたまひて、  
同 澤標 二・282

「自分は都でまたとなく悲しい日々であつたのに、君は一時の気まぐれにせよ、他の女にも情けをおかけになっておられたのか」と、おだやかならぬうらめしい気持ちにおなりになつて、

e 唐土には、顯はれても忍びても、乱りがはしきこといと多かりける。日本には、さらに御覽じうるところなし。

たとひあらむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。 同 薄雲 二・445

（唐土には表沙汰になつたものも、内密のものでも、王統の乱脈なことがまことに多いのであつた。しかし日本では全然お見だしになれる例がない。よしんばあつたとしても、このように秘密にしているだろうに、それをどうして伝えるべきがあるうか。）

もちろん、これはモに〈意外〉のモと呼ばれる用法があることに起因するとも言えるのだが、いずれにせよ〈並列・添加〉系の表現には、先に見た程度原理が働くことによつて、本質的に〈意外〉あるいは〈譲歩〉の意味合いを持つ可能性がある。それが、ニテモの場合、少なくとも中古にはそのような用法が見出されるわけである。

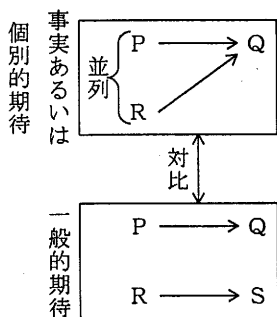
〈譲歩〉は条件文によつて表わされる意味ではあるが、本

質的に〈意外・極限〉の意味と深く結びついていることは、井島（一九九三・三）で論じた。要点のみ示せば、たとえば(15)aのような逆接仮定文（譲歩文）の語用論的構造は、(15)bのような前件が異なれば後件も異なるという形の一般的期待に対して、(15)cのような前件が異なっても後件は同じであるという形の事実あるいは個別的期待が対立する形で表わすことができる（図表四）。

(15) a 花子は晴れても傘を持っていく。

b 「普通の人は、雨が降れば傘を持っていくが、晴れば傘を持ていかない」 一般的期待

c 「花子は、雨が降れば傘を持ていくのは勿論、晴れても傘を持ていく」 事実あるいは個別的期待

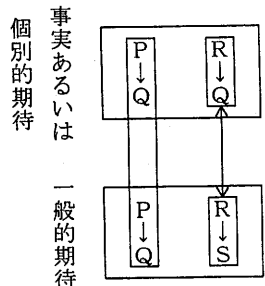


図表四

すなわち、順接仮定ではなく逆接仮定を用いる動機としては、他者のあるいは一般的な期待を裏切る事実あるいは個別

的期待を提示するものでなければならぬ。ここに一般的期待と事実あるいは個別的期待との対比関係が生ずる。他方、事実あるいは個別的期待の中では、前件が異なっても後件が同じであるところに並列関係が成り立っている。これが〈譲歩〉の構造であると考えられる。

さて、(二)で「雨が降って傘を持っていく」という事態(P↓Q)と、「晴れて傘を持っていく」という事態(R↓Q)との間には、後件が共通であるという点で並列関係があるだけではなく、〈実現可能性〉の差異も見出される。一般的期待と一致する前者の方が、一般的期待と一致しない後者よりも〈実現可能性〉が高い(あるいは、前者は起こることが期待され、後者は起こることが期待されていない)ということが言える。このように、〈譲歩〉の構造には〈意外・極限〉の構造が埋め込まれている、あるいは〈譲歩〉は〈意外・極限〉の一種であると言うこともできる。すなわち、ここで「P↓Q」のような条件文全体を一命題として図を書き直せば、井島(二〇〇五・一、三)で示した〈意外〉のものの構造と一致することになる(図表五)。



図表五

最後に、ダツテについては、歴史的には、ダトテから生じたとされるが、ジャトテ・ダトテ・ダツテいずれも近世からしか例が見出すことができず、比較的新しい形式であることがわかる。最初の頃は、〈譲歩〉を表わす条件文と解釈できる用例が目立つ(「いかに」「たとへ」と共起している)が、時代が下るにしたがって〈意外・極限〉の副助詞と解釈される用例が増えてくる。現代語においても、ダツテは口頭語的なニュアンスを持っているのは、そのことに起因すると思われる。

(16) a こんな事知らぬ大臣があればこそ、一夜も宿には居給はず、「いかに私が年端もゆかぬ者じやとて、無理な事ばかり」と、貝作らるゝ顔付、なんぼうそちの宗旨の元祖じやと、崇めらるゝ高野大師も、石磨の目を驚かさるべし。

b 「…たとい、目の見へぬ人じやとて、我に心のある人を

『傾城禁短氣』二之巻 200

どふ憎う思ふべし。…」 『傾城禁短氣』三之卷 264

c 助 「…いかに菩提の為だとて、尼になるとは惜しい事。」 『小袖曾我薊色縫』 390

d 助 「ハ、ア、病か。いろく<sup>かり</sup>の借の病だとて、高が五貫ばかりなら一兩にも足らぬ事だ。夫がほんの目腐金だ

『浮世風呂』前編下 99

e 盛場の小児だとて、鳴物<sup>なりもの</sup>におびえぬもあれば、おびえる子もあらうシ、寺地の者だとて、葬礼<sup>むすめ</sup>の強飯<sup>こはめ</sup>を食ふものもあらうシ、又食ふと限る事もねヘネ

『浮世風呂』四編上 243

f 助 「アイ私<sup>わち</sup>だつておまはんの為にすることだから、どふなつてもとはいふものゝ、二人が身にとつて末のつまらない動居<sup>どうぐ</sup>はしやアしませんから、案じずにちつとも早く能<sup>よ</sup>なつておくんなさいヨ。…」

『春色梅児誉美』初編一 59

g ロ 「仇<sup>あ</sup>の字だつてもまた大署<sup>ていげん</sup>にしちやア外聞<sup>がわいぶん</sup>がわりいから、達入<sup>たていれ</sup>とか横引<sup>よこひき</sup>とか、やらかさねへじやアなるめヘよ

『春色辰巳園』初編二 270

h 男 「大概<sup>ていがい</sup>で能<sup>い</sup>ことさ。垢<sup>あせ</sup>だつても毎日<sup>まいにち</sup>出る者でねヘ

『浮世風呂』二編上 116

もつとも、トテ(モ)が逆接假定すなわち(譲歩)表現として用いられるようになったのは、中世に遡る。

(17) a 小松殿、「まことにさこそおぼしめさら候らめ。子は

誰<sup>たれ</sup>とてもかなしければ、能々<sup>よくよく</sup>申候はん」とて入給ぬ。

『平家物語』卷三 敍文・上 212

b 唐皮<sup>からかわ</sup>・小鳥<sup>こがす</sup>の事までもこまかくと申たりければ、「今は我<sup>われ</sup>とてもながらふべしとも不覺<sup>おぼろ</sup>」とて、袖をかほにおしあててさめぐとなき給ふぞ、まことに事はりとおぼえて哀なる

『平家物語』卷十 三平氏・下 285

c 二人の侍、三人の雑色を呼びて語りけるは、「…是は麓<sup>ふもと</sup>近きところなれば、棄て置き奉りたりとて、如何にもして麓に返り給はぬ事はよもあらじ。…」

『義経記』卷五 194

d 「落合<sup>おちあ</sup>ひたりとて、嬉しとも言はざらんものゆへに、たゞ放ち合せて物を見よ」とて、一人も落ち合はず。

『義経記』卷五 220

g あたりちかく、きくおどろくべきいほりもなければ、

いかにすまふとて、むなしからじと思て、ねんごろに

いひて、つゝ<sup>つ</sup>みにほいとげてけり。『古今著聞集』卷八 259

k 撰長 「…兄には言訳するとても、此上決して番頭殿、ア

ノ善六へは、ナ、言譯なぞしやんナ。伯父御様、さうじやござりませぬか。」

『お染久松色読販』 247

1 切りは切つたが金は知らぬと云ふとても云はせうか。

『けいせい反魂香』 171

以上のように、サエ、マデ、デモ、ダツテおよびモが、そうなつた経緯はそれぞれ若干異なるにしても、いずれも(意

外・極限」表現でもあることを確認した。

## 1・2・2 〈意外・極限〉表現の構成要因

〈意外・極限〉表現といっても、そこにはさらにいくつかの要因が複合している。次に、その要因を解き明かしておきたい。

これまで、〈意外・極限〉というように、〈意外〉と〈極限〉という二つの概念を区別せずに論じてきたが、実は、両者には相違がある。〈極限〉とは期待世界におけるスケール上での限界値のことであり、当該事態が実現されているかどうかには直接関わりがない。一方、〈意外〉とは、必ずしも背後にスケールは必要ではなく、実現しないと期待されている事態が実際に実現したこととの対比の上で生ずるものである。たとえば、事実を述べる(18) a はおよそサエ、マデ、デモ、ダッテおよびモノのいずれもが使用可能であるが、(18) b、d の質問、希望、否定のように、事実ではない内容には、マデおよびモノくらいしか用いることができない。

(18) a 失業問題には、総理大臣(＊さえ／まで／でも／だつて／も)頭を悩ませている。

b 失業問題には、総理大臣(＊さえ／まで／＊でも／＊だつて／も)頭を悩ませているんですか。

c 失業問題には、総理大臣(＊さえ／まで／＊でも／＊

だつて／も)頭を絞ってほしい。

d 失業問題には、総理大臣(＊さえ／まで／＊でも／＊だつて／も)頭を悩ませているわけではない。

このことは、サエ、デモ、ダッテは〈意外〉表現と言つてよいが、マデは必ずしも〈意外〉表現ではないことを意味している(モノは〈單純他者肯定〉である可能性を残している)。

ただし、井島(二〇〇五・三)で検討したように、〈意外〉という含意は、そんなことは起こらないだろうという否定的な期待に対して、肯定的な事態が実現すればよいのであつて、背後に〈並列〉のような複数性、あるいはスケールは必ずしも必要とはしていない。そのような意味で、〈意外〉ではあつても単一の事態を表現する(19) a、c には、サエ、マデ、デモ、ダッテおよびモノは不適切である。

(19) a こんなに小さな川で全長二メートルの魚(が／＊さえ／＊まで／＊でも／＊だつて／??も)釣れた。

b あんなに汚い多摩川にアザラシ(が／＊さえ／＊まで／＊でも／＊だつて／??も)住みついた。

c 日本に二万年前の旧石器時代の遺跡(が／＊さえ／＊まで／＊でも／＊だつて／??も)見つかった。

それでは、サエ、マデ、デモ、ダッテおよびモノの共通点は、〈極限〉と呼ぶ方が適切なのだろうか。

菊地(一九九九・一〇)では、サエとマデとを比較して論じる中で、それらの〈累加〉(本稿の〈添加〉)用法に関する

違いとして、(20) a・bを挙げる。(20) aは「男の子が『キシヨー』と言うのも感心しないのに、それに加えて」というように、背後に程度差が見出される場合であり、その場合はサエも使えるが、(20) bは「男の子が『僕』と言うのは当然なので」ここには感心しない程度差というものは存在せず、ここにサエを用いるのは不自然であると指摘する。

(20) a 最近(は)女の子(は)「さえ／まで／でも／だって／も」「キシヨー」と言う。

b 最近(は)女の子(は)「\*さえ／まで／でも／だって／も」

「僕」と言う。(菊地(一九九九・一〇)の例に手を加えた)このことはマデが、背後に程度差のスケールを要する(極限)でない場合、すなわち単に当該内容が及ぶ範囲を表わす場合にも用いられるということの意味しているだろうが、(20) bには、デモ、ダツテ、モも使用可能である(ただし、ここで用いられているモは(単純他者肯定)のモとも解釈できる)。ここには、背後にスケールは存在しないし、(極限)を表わしてもいいない。ただ、「男の子が『僕』と言うのは当然だ」(期待される)が、「女の子が『僕』というのは当然ではない」(期待されていない)という、複数の事態間での期待との一致・不一致の違いを見出すことができる。

以上のように、厳密に議論すれば、(極限)という特徴もこれらすべてに共通しているとは言いがたい。むしろ共通点を総括するとすれば、期待世界に、(実現可能性)に違いのあ

る複数の事態のうち、(実現可能性)の極端なもの(最も高いものあるいは最も低いもの)にサエ、マデ、デモ、ダツテおよびモが用いられる、とも言う方が妥当かもしれない。とはいふものの、以下でも、厳密を要する議論でない限り、(意外・極限)という概略的な表現を踏襲する。

ここで、(実現可能性)ということについて、さらに考察を進めたい。(意外・極限)の表現としては、(実現可能性)の最も低い事態が実現すること(最低可能性実現)だけでなく、(実現可能性)の最も高い事態が実現しないこと(最高可能性非実現)であつてもよい。それぞれの場合、前者は、それよりも(実現可能性)の高い事態はすべて実現するといふことが、後者は、それよりも(実現可能性)の低い事態はすべて実現しないということが含意される。具体的には、(21) a・b、(22) a・bに見るように、前者の機能はマデ・デモ・ダツテが、後者の機能はサエが担っており、モはいずれの場合にも用いられる。(図表六)。

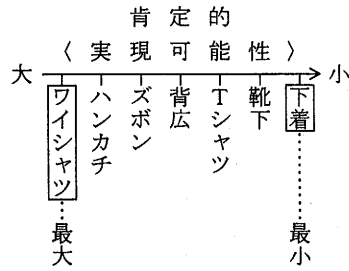
(21) a 花子(は)下着に「??さえ／まで／でも／だって／も」アイロンをかける。

b 花子(は)ワイシャツに「さえ／\*まで／\*でも／??だって／も」アイロンをかけない。

(22) a 魚を食べるときは、しつぽ「??さえ／まで／でも／だつて／も」食べる。

b 魚を食べるときは、しつぽ「さえ／\*まで／\*でも／

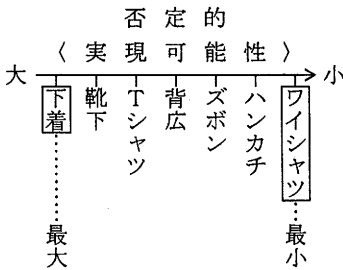
??だつて／も」残さない。



図表六

以上のことは、見方を変えて以下のように言い直すこともできる。〈実現可能性〉とは、(21) a のような、「アイロンをかける」可能性という肯定的な〈実現可能性〉もあるが、(21) b のような当該事態が実現しない可能性、この場合で言えば「アイロンをかける」可能性という否定的な〈実現可能性〉というものも考えうる。そうすると、スケール上に並ぶ順序は、まったく逆転し、下着が〈実現可能性〉最大となり、ワイシャツが〈実現可能性〉最小ということになる。その場合、〈意外〉を表わすためには、下着はその最大の〈実現可能性〉が実現しないことになるが、そうすると、下着には「アイロンをかける」という期待が裏切られる、すなわち「アイロン

をかける」ことになって、下着よりも〈実現可能性〉の低いものにも「アイロンをかける」ことが含意される（「下着にまでアイロンをかける」。一方、ワイシャツはその最大の否定的〈実現可能性〉が実現することになるが、そうすると、ワイシャツには「アイロンをかける」ことになり、それよりも〈実現可能性〉の低いものにも「アイロンをかける」ことが含意されることになる（「ワイシャツにさえアイロンをかける」。要するに、肯否を逆転するとともに、〈実現可能性〉の並べ方を逆転すれば、結果的には同じことになることをここで確認したことになる（図表七）。



図表七

以上のことは、肯定的〈実現可能性〉と否定的〈実現可能性〉を合わせて、サエ、マデ、デモ、ダツテおよびモはいず

れも、〈実現可能性〉が最も低いものに付く、と言つてもよい、ということであることをここで確認しておく。

しかしながら、サエとマデ・デモ・ダツテとは、常に対照的な使い分けがなされるわけではない。言い換えれば、〈実現可能性〉のスケールだけでサエ、マデ、デモ、ダツテおよびモの使い分けが決定されるわけではない。たとえば、(23) a・bは、サエ、マデ、デモ、ダツテおよびモのいずれも用いることができる。

(23) a この力士は力がある。好調なときは横綱(さえ／まで／でも／だって／も) 投げ飛ばす。(11) b

b あんなに勉強ができる山田(さえ／まで／でも／だって／も) 試験に落ちた。

それでは、(21)(22)と(23)とはどこが異なっているのだろうか。

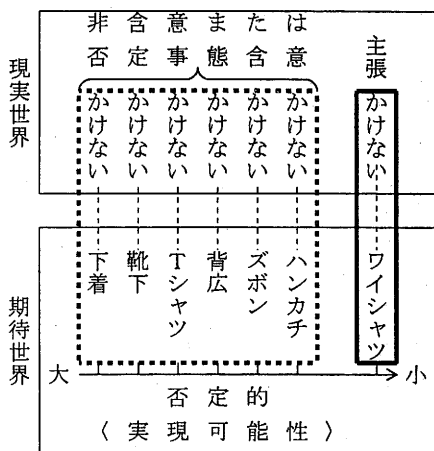
(21)、(22)の場合は、当該事態を主張するばかりでなく、それ以外の事態も含意している必要があった。たとえば「下着にアイロンをかける」なら、当然それ以外の洗濯物にもアイロンをかけることを含意しているし、「ワイシャツにアイロンをかけない」なら、当然それ以外の洗濯物にもアイロンをかけないことを含意している。しかし、(23) a・bは、当該事態を主張するばかりで、それ以外の事態に関する含意はない。たとえば、「横綱を投げ飛ばす」からといって、それ以下の力士に負けないとは限らないし、「山田が試験に落ちた」からといって、山田ほどできない受験生が試験に合格しないとも

限らない。

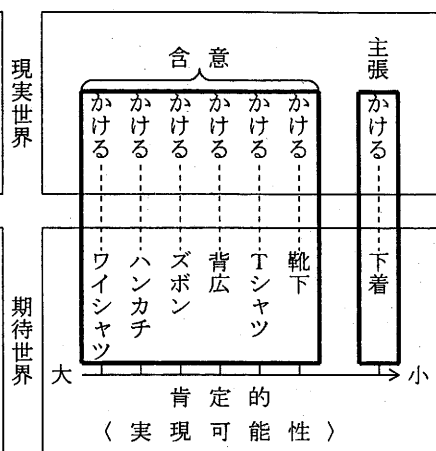
ここで浮かび上がってくるのは、期待世界における〈実現可能性〉の他に、現実世界で実際に事態が実現されるかどうかという要因である。具体的には、当該事態が実現されなければならぬのかどうかという点、それ以外の事態が実現されるかどうか含意されるかどうかという点の二点である。

もはや、〈実現可能性〉という概念だけで、サエは〈実現可能性〉最高の事態が実現されないこと、マデ・デモ・ダツテは〈実現可能性〉最低の事態が実現すること、といった一般化は間違っていたことは明白である。さらにさきほど、サエもマデ・デモ・ダツテも〈実現可能性〉が最低であるものに付くと言つてよいことを確認した。そこで、他の事態の實現を含意するかどうかという要因を加味して、サエ、マデ、デモ、ダツテおよびモの使い分けを再記述すれば、サエは〈実現可能性〉の最低の事態が実現されるが、それ以外の事態が実現されるかどうかは含意されない、もしくは否定的事態が実現されることが含意される場合、マデ・デモ・ダツテは〈実現可能性〉の最低の事態が実現されるが、それ以外の事態も実現されることが含意される場合に用いられる、ということができる(図表八—a・b)。





図表八 — b サエ



図表八 — a マデ他

以上のように、〈意外・極限〉を構成する要因を明らかにしていく段階で、すでにサエ、マデ、デモ、ダツテの相違点に踏み込んでいいるのはあるが、節を改めてそれらの相違点そのものに焦点を当てて検討を加えていく。

## 2 サエ・マデ・デモ・ダツテの相違点

第一に、当該事態が事実内容であるのかという相違が見られる。

まず、サエはおよそ事実内容にしか用いられないようである。「(ナオミが) パツシヴ・ヴォイスとアクティヴ・ヴォイスの区別がわからない」こと (24a)、「もうそろそろ赤ちゃんが欲しいと考えていた」こと (24b)、「その写真において、アリの眼が強い光を発していた」こと (24c) は事実内容である。

(24a) あれで英語の「え」の字もしやべれず、パツシヴ・ヴォイスとアクティヴ・ヴォイスの区別さえも分らないとは、誰も知るまいが己だけはちゃんと知っているのだ。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 274

b 実際、あなたがよその女と心中するなんて、そんなこと信じられることだったでしょうか。私たちは長い恋愛期間を経て結婚し、やっと二年が過ぎたばかりでしたし、もうそろそろ赤ちゃんが欲しいとさえ考えていた矢先の

ことだったのです。

宮本輝『錦繡』 31

c その中に、トランクス姿のモハメッド・アリが、腰に手を当て、あたりを睥睨<sup>びら</sup>している写真を表紙に使った、古い『ライフ』があったのだ。その写真においてさえ、アリの眼は、何か得体の知れないものへの挑戦の意志を秘めて、強い光を発していた。

沢木耕太郎『一瞬の夏』 239

それに対して、デモは、当該事態が事実内容であるかないかによって、〈極限〉か〈例示〉かに分かれるようである。

(25) a ~ c は、事実内容に用いられた〈極限〉のデモ、(26) a ~ h は、非事実内容に用いられた〈例示〉のデモである。具体的には、〈希望〉(26) a、〈質問〉(26) b・c、〈命令〉(26) d・e、〈提案〉(26) f、〈勧誘〉(26) g・h などである。

(25) a 「……どれだけの天才でもどれだけの馬鹿<sup>ばか</sup>でも自分一人だけの純粋な世界なんて存在しえないんだ。……」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 718

b いくらよくない父親でも、父親には相違ないのだから、行きどころのない老人を、放りっぱなしにしておくというわけにはいかなかった。 山本有三『路傍の石』 890

c 石油堀りには運不運がずいぶんあって、山師的な面がつきまとうのは事実であるが、日本のような貧弱な国でも井戸のあたる率はもう少し高い。

阿川弘之『山本五十六』 591

(26) a 「虫が鳴いてるわよ。」私が隣のお秋さんにつぶやくと、「ほんとにこんな晩は酒でも呑んで寝たいわね。」とお秋さんが云う。

林芙美子『放浪記』 170

b 「お客さん、すこし水が余っているけど、顔でも洗いますか?」「いや……顔よりも、飲ませてほしいね……」

安部公房『砂の女』 119

c 平木勲平は加藤の肩をたたいて、「その後どうだ。デイズェル機関についてなにか、新しいアイディアでも思いついたかね」といった。 新田次郎『孤高の人』 853

d マッチ用の字は、小さな和紙に、墨で「和光」と書いたのと、所番地電話番号を書いたのとを、それぞれ三通りずつこしらえて、どれでもいいのを使ってくれと丹羽みちに渡した 阿川弘之『山本五十六』 629

e 「まあ坐んなくてことよ。え、加藤、昔の同期生じゃねえか。なにも、そんな面をしないでもいいだろう。俺だって、好きこのんで、あの小僧の指をつめようなんていつてるのではない」「いくらか金でも出せというのか」加藤は立ったままだった。 新田次郎『孤高の人』 1153

f 「何かお食べになりたいものなくって」「ありがとう別に」「口がかわくでしょ。梨でもとりにやりましようね」 武者小路実篤『友情』 155

g 「お元気でしたか。」浅草の真中の劇場の中で久し振りに、私は別れた男の声を聞いた。「芝居でも見ていら

つしやい、一役済んだら私のはすむんだからお茶でも飲みましょう！」  
林芙美子『放浪記』 560

h 「どこかでアイスクリームでもいただきますせん？」「いいわ、でも気分は大丈夫？」 倉橋由美子『聖少女』 90

また、〈例示〉のデモがしばしばデモ・ヨウダという〈比況〉の形をとることも、デモが事実内容をとらないことを支持するものと思われる。

(27) a 「どうして、私、この頃こんなに気が弱くなったのかしら？ こないだうちは、どんな病気のひどいときだって何んとも思わなかった癖に……」と、ごく低い声で、独り言でも言うように口ごもった。  
堀辰雄「風立ちぬ」 178

b サナトリウムに着いた翌朝、自分の側室で私が目を醒ますと、小さな窓枠の中に、藍青色に晴れ切った空と、それからいくつもの真つ白い鶏冠のような山嶺が、そこにまるで大気からひよっくり生れでもしたような思いがけなさで、殆んど目ながいに見られた。

堀辰雄「風立ちぬ」 197

c ナオミは矢張彼方へよろよろ、此方へよろよろと、肩を打ツつけて歩いて行きます。すると打ツつけられた男も、ボートでも漕いでいるように、一緒にたつて端から端へよろけて行きます。  
谷崎潤一郎『痴人の愛』 377

d 「なんて、いやな子供だ」と頗る不快そうに吹き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほ

うり投げるかもしれない。  
太宰治『人間失格』 5

e 老婆は、一目下人を見ると、まるで穹にでも弾かれたように、飛び上った。  
芥川龍之介『羅生門』 15

一方で事実内容を表わすものの、〈譲歩〉の意味合いのないデモも見出される。ただし、このデモはデハと対をなすもので、モを略してデとすることはできないが、〈並列〉の意味が生きている。

(28) a 私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。  
夏目漱石『こころ』 460

b すると何故話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの間の前に固くなりました。その時奥さんが私を驚ろかした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。  
夏目漱石『こころ』 505

c この平凡な住宅街でも、いろいろな事件がおこっている。  
石川達三『青春の蹉跌』 21

d わたしが倒れるや、銀二郎はわざわざ目黒へはなしをつけに出歩いてくると、先方でも美代に模様を聞いて心配していたところで、  
石川淳「葦手」 123

ダツテは、〈譲歩〉のデモとおよそ同じような振る舞いを見せる。〈例示〉の用法はない。

(29) a 造幣局の見学だつてこんなに厳しいチェックは受けられない。  
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 24

b 「あなたの寝顔だつて、ずいぶんお老けになりましてよ。四十男みたい」 太宰治『人間失格』173

c 「…訴訟のためには、なんでもかんでも見さかいなく、みんな投げこんじまうんですからね。今に吾一ちゃんだつて、あんただつて、投げこまれないとは限りませんぜ。」

山本有三『路傍の石』173

さらに、マデは、(30) a ~ c のように事実内容にも、(31) a ~ c のように非事実内容にも(順に「質問」「否定」「推量」)用いられる。

(30) a 「呆れたねえ、これには」と町会議員も顔を皺めて、「尤も、種々な人の口から伝ひ伝つた話で、誰が言出したんだか能く解らない。しかし保証するとまて言う人が有るから確実だ」 島崎藤村『破戒』544

b 逃げ出すことしか考えていない囚人ならいざ知らず、部落の住人である女が、出入りの自由まで奪われて、我慢していられるわけがない… 安部公房『砂の女』156

c 平素は煩いと思うような女の児の喋舌まで、その朝にかぎつては、可懐しかった。 島崎藤村『破戒』637

(31) a 「へえ、どうしてそんな所まで剃るんだ?」「だつてそうでしょ、夜会服を着れば肩の方ですっかり出るでしょ。——」 谷崎潤一郎『痴人の愛』603

b 「…先生の御父さんと御母さんなんか、殆ど同なじよ。あなた、亡くなったのが」「亡くなられた日ですか」「ま

さか日まで同なじやないけれども。でもまあ同なじよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」

c 「…この分じや、まごまごしてると本宅まで乗っ取られるかも知れねえ。いや、とんだ友達があつたもんだ」 夏目漱石『こころ』171

石川淳「葦手」67

第二に、並列事態が実現されているかどうかに関する違いを見ていきたい。まず、サエについて見ていけば、サエは特に当該事態が否定的事態である場合が多いが、並列事態も否定的事態が実現される、すなわち(肯定的)事態が実現されないことは(32) a ~ d のようにしばしば見受けられる。(32) a では「ボタン」、「階数を示すランプ」や「定員や注意事項の表示」が存在せず、(32) b では「あの人の名前」が記憶になく、(32) c では「他(の人)」と墓参りに行ったことがなく、(32) d では本に「眼を通す(こと)」もしていない。一方、(32) e・f は並列事態も肯定的事態のばあいである。(32) e では言うまでもなく「分別のある大人」にもお世辞を言うのであろうし、(32) f では「普通の神経衰弱患者」や「田舎の物分りのにぶいお婆さん」には勿論その流儀で押し通すのだろう。さらに、(32) g・h になるとある意味で極端ではあろうが、特に並列事態があるとは考えにくい。

(32) a ボタンばかりではない。階数を示すランプもなく、定員や注意事項の表示もなく、メーカーの名前を書いたプ

レートさえ見あたらなかった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』13

b あのひとの名前も、また、顔かたちさえ記憶から遠ざかっている現在なお、あの鮎やの親爺の顔だけは絵にかけるほど正確に覚えていたとは、よつほどあの時の鮎がまずく、自分に寒さと苦痛を与えたものと思われます。

太宰治『人間失格』105

c 「私は」と先生が云った。「私はあなたに話すことの出来ないある理由があつて、他と一所にあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さへまだ伴れて行つた事がないのです」

夏目漱石『こころ』33

d 私の買うものの中には字引もありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あったのですから、私は返事に窮しました。

夏目漱石『こころ』352

e 基一郎に果して孫に対する愛情があるかどうかはさるるあやしい。が、とにかく彼は頑是ない孫にさえひとことのお世辞をいうのを忘れない男だったのである。

北杜夫『榎家の人々』155

f ところが基一郎はそんな必要もない普通の神経衰弱患者にも、田舎の物分りのにぶいお婆さんどころか立派なインテリの学校の先生にさえ、この流儀でおし通すのだ。

北杜夫『榎家の人々』165

g 「ヤケタ」とはあまりに直截でぶつきら棒で情味のない表現である。まさか電報代を節約したとも思えぬが、そんなことにも性格のあわぬ妻に腹立ちの気持さへ湧いてきた。

北杜夫『榎家の人々』1893

h いささか誇張が加えられていたけれども、話としては面白いし、翌朝、明正山岳会を、みごと出し抜いたあたりになると、関東を代表する一つの山岳会を相手取つて、加藤が関西の山岳会を代表して戦つたかのごとき語気さえ感じられた。

新田次郎『孤高の人』389

以上のような、現代語では優勢になりつつあるいわゆる「極限」のサエに対して、古典語以来の〈添加〉のサエも決して少なくない（やはり、現代より、近代に多いようだが）。すなわち、〈添加〉のサエは、並列事態が現実に実現し、それに加えて当該事態も実現したことを表わす。その際、当該事態は必ずしも並列事態に対して程度が〈極限〉であるというわけではない。たとえば、「顔が益々赤くなった」うえに「手がふるえた」(33) a) のであり、「行くのをやめたと云われるのが怖ろしい気がした」うえに「外国へ行くと思つていて行かなくなるとがっかりしはしないかと云う不安を感じた」(33) b) であり、「産婦は、すぐに深い眠りに落ちた」うえに「軒をかいだ」(33) c) のであり、「池の尾の町の者は、内供の俗でない事を仕合わせだと云つた」うえに「あの鼻だから出家したのだらうと批評した」(33) d) のであり、「風がない」う

えに「鳥の姿がない」(33)e)のであり、「重役にも同僚にも信用がない」うえに「冷やかす者がある」(33)f)のである。

(33)a 杉子は時々トランプのことを忘れているようにも見えた。武子に注意されてあわててまちがった札を出したりした。顔は益々赤くなって、どうかすると手さえふるえるように見えた。武者小路実篤『友情』124

b しかしどつちの気が強いのか、ややもすると押えようとしても押えきれない気持はどつちか。それは寧ろ大宮の外国へゆくことをのぞむ心だった。そして行くのをやめたと云われるのが反って怖ろしい気もした。外国へ行くと思つていて行かなくなるとがっかりしはしないかと云う不安さえ感じた。武者小路実篤『友情』153

c 然し暫くの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまった。厭さえて安々と何事も忘れたかのように見えた。有島武郎『小さき者へ』8

d 池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだろうと批評する者さえあった。芥川龍之介『鼻』26

e 僕の吐く白い息の他には街には動くものひとつなかった。風もなく、鳥の姿さえ見えない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』677

f 精励恪勤、品行方正で「君子」の仇名を取つた私も、ナオミのことですつかり味噌を付けてしまつて、重役にも同僚にも信用がなく、甚だしきは今度の母の死去に就いても、それを口実に休むのだろうと、冷やかす者さえあるのです。谷崎潤一郎『痴人の愛』541

それに対して、マデには必ず並列事態が実現していなければならぬ。すなわち、「先生が自分を嫌う」(34)a、「すでに」洗濯した物をきちんとたたむ」(34)b、「話してよいことをしやべる」(34)c、「母やもつと身近な親族を呼び寄せる」(34)d)ことはいずれも事実である。

(34)a 先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭になつたのだろうと推測していた。夏目漱石『こころ』91

b 「なにも叱りやしないじゃないの。洗濯するものまで、きちんと畳んでおくって、よく笑われるけど、性分ね。」川端康成『雪国』100

c 私は仕方がないから云わないで可い事まで喋舌つた。夏目漱石『こころ』228

d とにかく兄や妹の夫まで呼び寄せた私が、父の病氣を打遣つて、東京へ行く訳には行かなかつた。夏目漱石『こころ』239

デモ・ダツテは、後の(35)、(36)に見るように、複数の対象を列挙することが可能でもあり、並列事態が実現していることは言うまでもないだろう。

第三に、当該対象が特定のものに限るか、不特定のものでもよいかという相違が考えられる。

デモ・ダツテ（それからモ）は、不特定の対象をとることが可能である。そのことに對しては、三つの根拠を挙げることが出来る。

まず、デモ・ダツテ（およびモ）は、一度に複数の対象を列挙することができる。対象が列挙されるということは、とりもなおさず、対象が一つに特定されていないことを表わす。

(35) a 再びナオミのあらゆる部分が、眼でも鼻でも手でも足でも、蠱惑に充ちて来るようになり、そしてそれらの一つ一つが、私に取って味わい尽せぬ無上の物になるのでした。

谷崎潤一郎『痴人の愛』277  
b 繻子と云つても綿入りの繻子でしたが、羽織も着物も全体が無地の蝦色で、草履の鼻緒や、羽織の紐にまで蝦色を使い、その他はすべて、半襟でも、帯でも、帯留でも、襦袢の裡でも、袖口でも、袴でも、一様に淡い水色を配しました。

谷崎潤一郎『痴人の愛』97  
c 吾一は道雄から、自分の知らないようなものを突きつけられると、いつも、つい、反発しないではいられなかった。このコーヒーに限らず、本でも、おもちゃでも、道雄はとかく吾一の知らないようなものを持ち出しては、彼をへこまそうとするように思えてならなかった。

山本有三『路傍の石』48

(36)

a 「もつとも幸か不幸かそこまでまだ研究が進んではおらんのです。今の段階では脳をとりだした方がより明確な記憶の収集ができるのですよ」「やれやれ」と私は言った。骨だつて脳だつて抜かれてしまえば同じようなものだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』101  
b 「…苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』373  
c 「トランクの二十や三十持ったからつておえぱりでないよ」哲子にいつて、「あら、トランクじゃないわよ、トラックでしょ」「なんだい、トランクだつてトラックだつて同じこつちやないか、…」

野坂昭如『ブアボーイ』437  
d 「結婚するとなつたら、男だつて、女だつて、不安になるのはあたり前でしょう。特に女の人にとつてはね。

…」  
新田次郎『孤高の人』596  
次に、デモ・ダツテ（およびモ）は、不定詞をとることができる（しばしば複数列挙の一例として）。不定詞をとる場合、述語が肯定ならば全部肯定、述語が否定ならば全部否定を表わすが、これも特定のものに限つて肯定・否定するのはなく、どれと特定することなく、すべてをひとまとめにし

て肯定・否定しているという意味で、不特定用法であると言える。また、しばしば先の複数列挙の一つとして、不定詞が用いられる。

(37) a 「ええ、親戚でも何でもありません。僕は宇都宮の生

れですが、あれは生粋の江戸ッ児で、実家は今でも東京にあるんです。…」 谷崎潤一郎『痴人の愛』 412

b 「よっちゃん、毎朝牛と仲よくしてるね。」「ええ、あの子、そりやはたらきものよ。イワシの罐でもなんでも、かついじやうの。」 石川淳「かよい小町」 325

c そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。 芥川龍之介「鼻」 39

d その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いじらしさに打たれてしまう。 芥川龍之介「芋粥」 50

e 「あれならどれを使ってもいい。あんたならかまわないよ。マフラーでもコートでもどれでも好きなのを持つていいよ」

(38) a 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 882

「…どうして明日の開館いちばんに来ないの？そうすれば一角獣だろうが三角獣だろうが、なんだって好きに調べられるじゃない」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 271

b 「じゃあどうして学校をやめなかったの？やめようと思えばいつでもやめられたんでしょ？」「まあ、そりや

ね」と私は言って、そのことについて少し考えてみた。たしかにやめようと思えばいつだってやめられたのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 650

c 「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょう」 夏目漱石『こころ』 69

d 「でも、そうじゃ御座ませんか——新平民だつて何だつて毅然した方の方が、あんな口先ばかりの方よりは余程好いじゃ御座ませんか」 島崎藤村『破戒』 680

e 「ええ玉づけだつて、何だつてやります。」「じゃアやつて見て下さい、そして二三日してからきめましょう」

林芙美子『放浪記』 328

さらに、デモ・ダツテ（およびモ）は、数量・程度副詞および数量詞をとることができる。数量・程度副詞および数量詞も、対象を特定しているわけではないという意味で、不特定を表わす根拠と考えたい。

(39) a 少しでも腕をゆるめると、女はぐたりとした。女の髪が彼の頬で押しつぶれるほどに首をかかえているので、手は懐に入っていた。 川端康成『雪国』 51

b 「いいの、いいの。でも婆や、少しでも聡を可愛いと思うのなら、ちよつとも抱いてやつてよ。…」

北杜夫『楡家の人々』 606

c まともな男、一人前の男、少しでも骨のある男なら、そんなことは有り得ない、考えられないことだ。



d 北杜夫『榆家の人々』 772  
今こそ心から、登美子を殺したかった。二度でも三度でも、あの女を殺してやりたかった。

e 石川達三『青春の蹉跌』 490  
「そんなもの、あたしが定一つあんのところへ行けば、二十でも三十でも、いくらでも貰えるわ」

f 北杜夫『榆家の人々』 662  
三和参謀が、「長官、さあ、十ダースいただきますよ」と催促すると、「ああ、十ダースでも五十ダースでも出すよ。副官、よろしくやっといてくれ」

(40) 阿川弘之『山本五十六』 1028  
a 「…女は、しばって、家の中にほうり込んである！助けたけりや、早くこの綱をあげろ！それまでは、女には、指一本だつて触れさせはしないからな！…」

b 安部公房『砂の女』 198  
「私が此処でもって、こんなに満足しているのが、あなたにはおわかりにならないの？どんなに体の悪いときでも、私は一度だつて家へ帰りたいなんぞと思ったことはないわ。…」  
堀辰雄『風立ちぬ』 257

c 「大学位卒業したつて、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」

d 夏目漱石『こころ』 181  
あれもこれを書きたい。山のように書きたい思いであ

りながら、私の書いたものなぞ、一枚だつて売れやしない。それだけの事だ。  
林美美子『放浪記』 919

それに対して、サエ・マデは、基本的には、複数列挙されることも、不定詞に付くことも、数量・程度副詞や数量詞に付くこともない。ただし、格助詞としてのマデは数詞（数量詞ではない）につくことはある。

(41) a 「あいづ、死んじやったんじやないの」太郎は母に言った。「疲れて（つか）いるのよ。六時まで寝かしてあげなさい。それから皆で夕食をしましょう」

曾野綾子『太郎物語 高校編』 418  
b 痛いほど砂にくいこませた爪先に、全身の重みをかけ、十かぞえたら、飛び出そう……しかし、十三まで数えても、まだ思いきれず、それからさらに四呼吸も重ねて、やっとうみきっていた。  
安部公房『砂の女』 189

以上の結果をまとめると、次の表のようになる(図表九)。

ダツテ	マデ		サエ	
	デモ 例示	譲歩	添加 極端	並列事 態
現実	非現実	現実	現実	当該事 態
有	潜在的に 有	有	有／無	並列事 態
特定／不 特定	特定／不 特定	特定	特定	対象の 特定性

図表九

### 3 サエのその他の問題

#### 3・1 主節のサエ

主節のサエについて、《意外・極限》に関わる問題は第1、2節で論じた。それ以外に問題にされることとしては、いわゆるスコープに関する議論がある。ここではその問題について考察を加えたい。

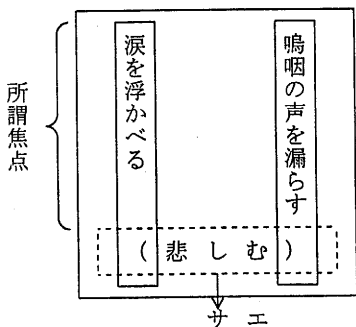
菊地（一九九九・一〇、二〇〇三・一一）では、市川（一九八九・三）の議論を承けて、サエとデサエとの違いは、「P（述語を含む句）レベルのとりたて」であるか「N（名詞句）レベルのとりたて」であるかの違いであると論じている。

すなわち、デサエはそれが付いた名詞句（42）の「僕」が潜在的な名詞句（42）の「君」と、「疲れた」という共通項を介した並列関係であることを表わしている。

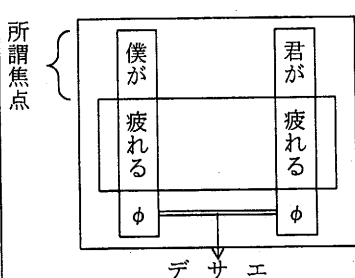
(42) 僕でさえ疲れたのだから、君はどんなに疲れたことだろう。

それに対して、サエは名詞句に付いている場合であっても

(43) a、述語を含む句についている場合と同じく (43) b、述語を含む命題全体（涙を浮かべる）が、潜在的な命題（例えば「嗚咽の声を漏らす」と、いずれも「悲しみ」の振る舞いであるという意味で、並列関係にあることを表わしてい



図表十一 b



図表十一 a

る。  
(43) a 涙さえ浮かべている。  
b 涙を浮かべてさえいる。  
このことを図示すると、以下のように示すことができる(図表十一 a・b)。

サエ・デサエの置き換えが可能に見える場合もあるが、それは「Pレベルのとりたて」とも、「Nレベルのとりたて」とも解釈できる場合であるという。

(44) a おかゆさえ／でさえ喉を通らない。

b お粥さえ喉を通らないんだから、まして起きあがることはできない。

c お粥でさえ喉を通らないんだから、ましてご飯は食べられない。

以上の定式化は妥当なものであると考えられる。このいわゆるスコープの違いは、本稿のような期待と対照の文法の観点から言えば、図表十に示したように、「要素対照」と「命題対照」との相違であるということになる。

そのような観点でマデ、デモ、ダツテを振り返ると、まず、マデは要素対比も命題対比もいずれにも用いられる。(45) aは、「父」と「母」とが「倒れた」という共通性を持つという点で並列関係にある要素対照であり、(45) bでは「涙を浮かべる」という命題は「声をふるわせる」という命題とともに、「感動する」というような共通性を持つという点で並列関係にある命題対照である。

(45) a 母ばかりでなく父まで倒れてしまった。

b 声をふるわせ、涙まで浮かべて講義した。

デモ、ダツテは要素対照のみに用いられる。(46) aは「おか

ゆ」が「喉を通らない」ほどであるから、白いご飯やそれ以外ののごちそうはなおさら「喉を通らない」ということであるうし、(46) bは「蛙」が「生きている」ように、「おけら」も「あめんぼ」も「生きている」ということであろう。

(46) a おかゆでも喉を通らない。

b 蛙だつて生きている。

結論をまとめると、サエは命題対照に、デサエ・デモ・ダツテは要素対照に、マデはその両方に用いられるということになる。

### 3・2 条件節のサエ

条件節の〈十分条件〉のサエについては、〈極限〉のサエと意味的に結びつけようとする議論がいくつか見られるが、いずれも必ずしも成功しているとは思われない。

さて、(47) aはいわゆる〈十分条件〉のサエであるが、(47) bはこれに複数の条件を〈添加〉したものである。このような条件文を理論的には考えることは可能で、もしこのような条件文が実際に存在すれば主節のサエと条件節のサエとを結び付けることができるのであるが、実際の用例の中には見出しがたい。とりあえず、この用法を〈そのうえ〉のサエと呼んでおきたい。それに対して、(47) cは、複数の条件はすでに実現しており、それ以外のもう一つの条件を条件節としてとつ

たものである。

(47) a 杜宅さえあれば、勤める。(沼田(一九八六・四))

b ??給料がよくて、デスクワークで、九時五時で、そのう  
え杜宅さえあれば、勤める。

c 給料がよくて、デスクワークで、九時五時なんだから、  
あとは杜宅さえあれば、勤める。

このような例は、(48) a ~ f のように近現代語においても少  
なからず見出すことができる。この用法を(あと)のサエ  
と呼んでおきたい。

(48) a 父牛は亜メリカ産、母は斯々、悪い癖さえ無くば西乃  
入牧場の名牛とも唄われたであろうに、と言出して嘆息  
した。 島崎藤村『破壊』 311

b 昔は僕だつて若かつたし、世の中のことは何にも分ら  
なかった。僕は夢中になって生きていたし、世界とい  
うのはそういうもの、憎悪も残酷も無慈悲もなくて、愛さ  
えあれば足りるものと、そう思っていたんだ。

福永武彦『草の花』 323  
c 「お母様のおっしゃることも一理はありますけど、出  
馬さえされていれば、もちろん当選したわ。…」

北杜夫『榆家の人々』 537  
d これは悪い生活ではなかった。人間はこのくらいのと  
ころで自足すべきだし、現に彼は充分に満ち足りていた。  
ただ、仕事さえ端緒についていたら、戦局がもう少し好

転してくれたら、そして苦労をしている息子や娘たちに  
対してなにか後ろめたいようなこの感情さえなかったな  
ら……。

北杜夫『榆家の人々』 1640

e しかし冬がやってくる前に、僕は少しなりとも森のこ  
とを探らねばならなかった。影に地図を渡す約束の時期  
になっていたし、彼は僕に森を調べろと命じたのだ。森  
さえ調べ終えれば地図は完成する。

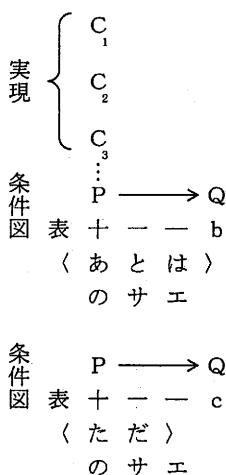
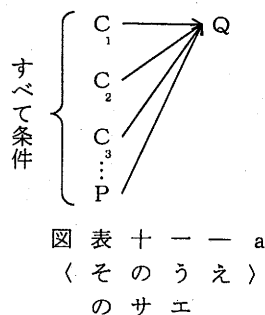
村上春樹『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』 491

f 「私たちの知っている葉ちゃん、とても素直で、よ  
く気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、  
飲んでも、……神様みたいないい子でした」

太宰治『人間失格』 256

それに対して、最も多く見出されるいわゆる(十分条件)  
のサエは、他に条件は必要としていない。結果Qが実現され  
るためには、条件Pの実現のみで十分であるという意味合い  
である。このような用法を、「ただ」のサエと呼んでおく。

この三者を図示して示せば、次のように示すことができる(図  
表十一—a~c)。



ここから、次のような説明ができないだろうか。主文のサエは現実の事態を〈添加〉するものであったが、条件節において、仮定条件を〈添加〉する働きが〈そのうえ〉のサエであると考えられる。さらに、他の条件が実現して、もう一つの条件を仮定条件として〈添加〉するものが〈あととは〉のサエであると考えられる。ここで、主文のサエから、必ず〈そのうえ〉のサエを経由しなければ〈あととは〉のサエが導かれないわけではない。すでに実現している事態に、もう一つ

実現している事態を〈添加〉するのが主文のサエであり、仮定条件を〈添加〉するのが〈あととは〉のサエであると言ってもよい。

ここで、一般に、条件であつたものが一旦実現してしまうと、それがもとは条件であつたことが見えにくくなるのではなからうか。たとえば、すでに「給料がよく」「デスクワークで」「九時五時で」あるという条件が満たされていれば、そのような条件は問題にされなくなり、「社宅がある」かどうかが目され、あたかも「社宅がある」かどうかが唯一の条件であるかのように認識されるようになるのではないだろうか。ここに、〈あととは〉のサエから、〈ただ〉のサエ、すなわち典型的な〈十分条件〉のサエが生じる契機があるのではないだろうか。

#### 4 マデのその他の問題

マデに関しては、否定文中での振る舞いがサエとは異なるということが、茂木（一九九九・三）において指摘されている。まず、肯定文では、マデ・サエともに、(49) c に示すように、およそ同じ解釈となる。

- (49) a 親にまで打ち明けた。  
b 親にさえ打ち明けた。  
c 解釈（やっかいな問題なので仕方なく）言い出しに

く、あるいは普段こんなことを話さない「親」にも打ち明けた。

それに対して、否定文では、マデの場合には、(50) c・d の二つの解釈が可能であるのに対して、サエの場合は、(50) cのみ可能で、(50) d という解釈はできない。

(50) a 親にまで打ち明けなかった。

b 親にさえ打ち明けなかった。

c 解釈1：(誰にも言えない内容だったので) 最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。

d 解釈2：(あまり問題を大きくしたくなかったので)

信頼できる他の人(「友人」等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

この現象に対して、「解釈1」は、「まで」「さえ」のスコープが否定辞「ない」のスコープよりも広い、すなわち「まで」「さえ」が否定のスコープに含まれない場合(これを「W」スコープとする)に生じるものであるとし、「一方の「解釈2」は、「まで」「さえ」のスコープが「ない」のスコープよりも狭い、すなわち、「まで」「さえ」が否定のスコープに含まれる場合(これを「N」スコープとする)に生じるものである」と論じ、マデとサエとで、スコープのとりかたに次のような違いがあるとするとする。

(51) a 親にまで「打ち明けなかった」た。(Wスコープ)  
a 親にまで「打ち明け」なかった。(Nスコープ)

b 親にさえ「打ち明けなかった」た。(Wスコープ)  
b \* 親にさえ「打ち明け」なかった。(Nスコープ)  
その証拠として、Nスコープをとるマデは以下のようにブラフレイズできるという。

(52) a 親にまで打ち明けなかった。(Nスコープ)

b 親にまでは打ち明けなかった。

c 親にまで打ち明けた、のではない。

以上のことを、マデも含めて表にすると以下のような(図表十二)。

	さえ	まで	までは
Wスコープ	○	○	×
Nスコープ	×	○	○

二 十 表 図

ただし、この議論には、いくつかの問題がある。第一に、ここで用いられている「スコープ」という術語は、直接影響を及ぼす部分という意味なら、むしろ「フォーカス(焦点)」と呼ぶべきである(この点については、茂木氏自身も気が付いている)。

第二に、ここでは、否定辞だけでなく、副助詞も「スコープ」をとることになっており、それだけでも特殊な議論である。ただし、「Wスコープ」の場合は、否定辞のスコープ

(「」で示す)がマデのスコープ(「」で示す)に含まれており(53)a、「Nスコープ」の場合は、逆にまでのスコープが否定辞のスコープに含まれる(53)b、という議論は、対称的なきれいな形をしているように見える。

(53) a 親にまで「打ち明け」なかつた。(Wスコープ)

’ a 親にまで「打ち明け」なかつた。(Nスコープ)

ただし、否定極性辞が含まれたりして構造が複雑になった場合に、否定辞とどのように呼応しているかなど、説明が難しくなることが予想される(この場合、かきまぜ規則などを用いて説明するのだろうか)。

(54) a 一言も親にまで「打ち明け」なかつた。

’ a 親にまで(は)全然「打ち明け」なかつた。

第三に、マデとサエとの間に、どうしてそのような違いがあるかが説明されていない。構文現象の指摘としては面白いが、それを「スコープ」の広狭で説明してしまうと、それ以上はどうしてそのような違いが生ずるのかが説明できない。

この点が最も大きな問題と言えるかもしれない。

さて、この違いを、期待と対照の構造を用いて考えてみたい。まず、解釈1の場合、友人などには打ち明けないことでも、信頼している親には打ち明けるであろう、という潜在的な期待に対して、現実には、友人などには打ち明けなかったのはもちろん、親にも打ち明けなかった、ということを表わしている。ここで、打ち明けやすさというスケールを設定す

れば、親の方が友人などよりも上位に位置することになる。また、マデの表わす(並列)関係は、現実には友人などにも親にもともに打ち明けなかったというように、現実世界において機能している。

また、解釈2の場合、信頼できる友人に打ち明けることはもちろん、親にも打ち明けるだろう、という潜在的な期待に対して、現実には、友人には打ち明けたものの、親には打ち明けなかった、ということを表わしている。この場合、打ち明けやすさのスケール上では、友人の方が親よりも上位に位置することになる。また、マデの表わす(並列)関係は、期待としては友人にも親にも打ち明けるだろうと思っていたというように、期待世界において機能している。

(55) a 期待「親には打ち明けるが、友人には打ち明けない」

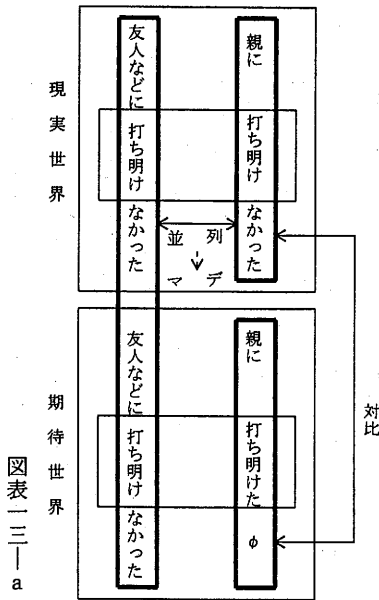
b 現実「親にも打ち明けず、友人にも打ち明けなかった」

(56) a 期待「友人に打ち明けるばかりでなく、親にも打ち明ける」

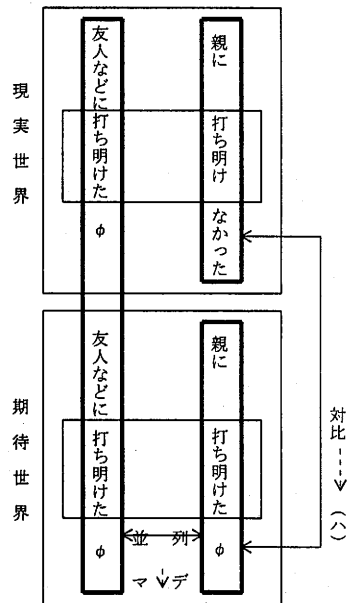
b 現実「友人には打ち明けたが、親には打ち明けなかった」  
このように、マデは、現実世界でも期待世界でもどちらの世界でも働きのことがわかる。それに対して、サエは解釈1しか可能ではなかった。このことは、すでに見たように、サエが現実世界でしか働くことができないということから説明できる。先に、サエが解釈1しか持たないことを、かなり特殊なスコープ理論によって説明しようとする説を見たが、

その説では、単にまでとサエとの間にはそのような違いがあるという事実の指摘にとどまり、どうしてマデとサエとの間にそのような違いがあるのか、それ以上の説明はできない。しかし、期待と対象を用いた説明を適用すれば、サエは現実世界の事態にしか用いられないが、マデは現実世界・期待世界いずれの事態にも用いられるという、より一般的な構文的な事実還元することができる(図表十三—a・b)。

# 解釈1



# 解釈2



## 5 デモのその他の問題

まず、デモは寺村(一九九一・二)によると「提案のデモ」と「譲歩のデモ」とに二分され、丹羽(一九九五・二)でも「例示の「でも」と「譲歩の「でも」に二分されている。

次に、沼田(一九八六・四)では、まずとりたてて詞としてのデモを「選択的例示」と呼ぶが、「単純他者肯定」のモでは「かつ」で結び付けられていた主張と含みとが、「選択的例示」のデモでは「または」で結び付けられている。

(57) a 買い物にでも出かけよう。

b 風邪でも引いたのか元気がない。



でも 主張・断定・自者肯定

または

含み・断定・他者肯定

さらに、(例示)のデモの文末制約という形で議論されてきたことであるが、(例示)のデモが事実の描写には用いられないということは、特に森山(一九九八・四)で、「か何か」と対比しつつ、主題的に論じられた。

以上のように、デモについて議論するにあたっては、主に次の三点の説明を避けて通るわけには行かない。

①デモには(例示)「選択的例示」など(意外)「極限提示」「譲歩」などの二つの用法がある。

②(例示)のデモは、モが「かつ」の関係であるのに対して、「または」の関係となる。

③(例示)のデモは、事実の描写に用いることができない。

中でも、③については森山(一九九八・四)で中心的に議論され、「か何か」と対比しつつ、(58)a・bのような例をもとに、「か何か」では、一例がほかの例(つまり「何か」という形で示されるもの)と並列的に提示されるという特徴づけをすることができるとして「か何か」の特徴を「一例並列提示」と呼び、「例示の「でも」では、発話現場で(暫定的なものであれ意識に上っているのは当該要素のみである)として「例示」のデモの特徴を「暫定的抽出」と呼んでいる。

(58) a 眠気覚ましにコーヒー\*でも/か何か飲みなさい。紅

茶でよかったらここにあるけど。

b コーヒー?でも/か何か飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。

確かに、(例示)のデモと「か何か」の意味の違いの記述としてはこのような説明が優れたものであることは間違いないとしても、このこととデモの他の特徴①・②などとそれがどのように結びつくのか、そもそも「暫定的抽出」という概念はどのような次元のものであるのか、などを説明しようとする、必ずしも充分なものとは言いがたい。

それでは、どのような説明を与えればよいのか、ということになるが、特に事新しい説明をしようというわけではない。ここでもデモを条件文と結び付けた説明を採用しようというわけである。

「P<sub>1</sub>ならばQ」「P<sub>2</sub>ならばQ」「P<sub>3</sub>ならばQ」……という条件関係が並列的に並んでいる。すなわち、ここに〈並列〉関係を表わすモが用いられる契機がある。さて、モには例外的な用法も少なからずあるものの、〈単純他者肯定〉のモ、〈意外〉のモ、〈柔らげ〉のモに大きく分けられる。〈単純他者肯定〉のモは単純に言表事態以外にそれと平行的な事態が存在することを表わすものであるが、「P<sub>1</sub>ならばQ」「P<sub>2</sub>ならばQ」「P<sub>3</sub>ならばQ」……という各条件関係相互は、選択的關係すなわち「または」の関係にある。すなわち「かつ」の関係を表わすモの〈並列〉の働きが、条件関係を介することによ

って、" または " の関係に転換されるのである。この選択的關係を表わすデモがいわゆる〈例示〉のデモと呼ばれるものであり、このようにして②は説明できる。

次に、同範疇であることを表わす〈並列〉の關係は、同範疇の要素の中に差異を見出そうとする程度原理が働くと、そこに要素間の程度差がクローズアップされることになり、〈意外・極限〉の意味合いが生ずると論じたが、その〈意外・極限〉の働きが、条件關係間に働いたものが〈意外・極限〉のデモであると考えられる。このように、デモにはモに〈單純他者肯定〉・〈意外・極限〉という違いがあるのと平行的に、〈例示〉と〈意外・極限〉の違いがあることになり、このようにして①は説明できる。

ここで、もう一つ〈柔らげ〉のモに対応するものも、あまり目立たないが存在するのではないだろうか。たとえば、次の場合は、他に選択肢はないが、あたかもあるかのようなニュアンスを付け加える、という意味で〈柔らげ〉に対応するデモの用法と言えるのではないだろうか。

(59) (コーヒーしかない場合に)

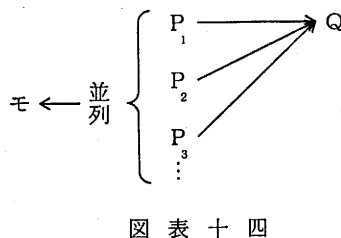
コーヒーでもいいがですか。

また、ここでは副助詞のデモについて議論しているが、接続助詞のデモにも、「並列」と「譲歩」との二用法がある。

(60) a 右の道を行っても、左の道を行っても、駅にたどり着く。

b 子どもがやっても、もつと上手にできる。

さらに、条件關係が背後にあるということは、単なる事実の描写をしているわけではないということになる。このようにして、③も説明することができる(図表十四)。



図表十四

以上のように、副助詞デモの背後には、〈例示〉〈意外・極限〉を問わず共通して条件表現の原理が伏在していると考えられるが、〈例示〉は直接には条件表現に言い換えられないほど機能が拡張している。

おわりに

本稿では、井島(一九九二・二)で副助詞の体系と〈対比・限定〉系のダケ、バカリ、シカ、井島(二〇〇五・一、三)

でモを分析したのに続き、モ以外の〈並列・添加〉系のサエ、マデ、デモ、ダッテの分析を行った。ここで目指したのは、副助詞の全体を俯瞰する体系的視点を維持しつつ、個々の副助詞の記述的研究をその中に位置付けていくことである。さらに続けて、〈程度・概言〉系のホド、クライ、バカリなども究明を進めたい。

## 注

1 中西(一九九五・一〇)では、肯定文に用いられるサエ・マデの用法を「意外な自者へ向かう累加」、否定文に用いられるサエの用法を「意外な自者からの類推」と呼んで説明するが、必ずしも明確な議論とは言い難い。

2 仮定条件節に用いられる〈最低条件〉のサエを主節に用いられる〈意外・極限〉のサエと結び付けようとする試みは、さまざまに行われている。たとえば、山中(一九九一・一〇)では、〈意外・極限〉のサエの EXPECT 値の極端値を提示する機能と、条件文の前件が設定する含意の序列関係を逆転させる機能とが複合して、明示した要素以外の要素は必要ないという意味となるとする。三井(一九九七・三)は、サエは全体として、否定を伴う期待という「含み」と「序列のなかで最たるもの」という二つの特徴が複合した「最小値」という特徴を持っているが、「前件が成立すれば、そのときにのみ後件が成立する」という意味を持つ「バ形式1」の構文的環境におかれたときに〈最低条件〉という意味が派生するのであると論じる。

## 資料

万葉集・源氏物語・『日本古典文学全集』小学館、平家物語・義経記・古今著聞集・春色梅児誉美・春色辰巳園・お染久松色読販・けいせい反魂香・小袖曾我薊色縫・傾城禁短気・浮世風呂・『日本古典文学大系』岩波書店、太平記・『土井本太平記本文及び語彙索引』勉誠社、とはすがたり・『とはすがたり総索引』笠間書院、阿川弘之『山本五十六』・芥川龍之介『鼻』・『芋粥』・『羅生門』・安部公房『砂の女』・有島武郎『小さき者へ』・石川淳『葦手』・『かよい小町』・石川達三『青春の蹉跌』・川端康成『雪国』・北杜夫『榎家の人々』・倉橋由美子『聖少女』・沢木耕太郎『一瞬の夏』・島崎藤村『破戒』・曾野綾子『太郎物語 高校編』・太宰治『人間失格』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・夏目漱石『こころ』・新田次郎『孤高の人』・野坂昭如『アポロイ』・林芙美子『放浪記』・堀辰雄『風立ちぬ』・宮沢賢治『銀河鉄道の夜』・宮本輝『錦繡』・武者小路実篤『友情』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本有三『路傍の石』CD-ROM版『新潮文庫の一〇〇冊』

## 参考文献

松村 明(一九五八・四)「副助詞のみ・ばかり・まで・など・

だに・すら・さへ・ばしー」『解釈と鑑賞』第二十三巻第

四号

林 巨樹(一九六七・二)「副助詞まで・など・なんと(古典語・

現代語』、『国文学』第十二卷第二号（松村明 編（一九六九・四）所収）

長谷川清喜（一九六七・二）「副助詞さへ（え）・でも（古典語・現代語）』、『国文学』第十二卷第二号（松村明 編（一九六九・四）所収）

堀田 要治（一九六七・一）「でも（付 なりと）——副助詞（現代語）』、『国文学』第十二卷第二号（松村明 編（一九六九・四）所収）

松村 明 編（一九六九・四）『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社

鶴 久（一九七〇・一一）「日本語における助詞の機能と解釈——係助詞 だに・すら・さへ（さえ）（しか）（でも）』、『解釈と鑑賞』第三十五卷第十三号

近藤 泰弘（一九八三・三）「副助詞の体系——現代日本語」『日本女子大学紀要 文学部』第三十二号

沼田 善子（一九八四・四）「とりたて詞の意味と文法——モ、ダケ、サエを例として」『日本語学』第三卷第四号

坂原 茂（一九八六・三）『さえ』の語用論的考察』『金沢大学教養学部論集 人文科学篇』第二十三卷第二号

沼田 善子（一九八六・四）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

小野 米一・李志華（一九八八・一〇）「係助詞『でも』と『だって』の用法について」『北海道教育大学紀要』第一部A第

三十九卷第一号

市川 保子（一九八九・三）『サエ』と『デサエ』——その構文と意味——『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第四号

沼田 善子（一九八九・八）「とりたて詞とムード」仁田義雄 編『日本語のモダリティ』くろしお出版

寺村 秀夫（一九九一・二）『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版

市川 保子（一九九一・三）「とりたて詞と発話・伝達のモダリティに関する一考察」『文芸言語研究 言語篇』第十九号（筑波大学）

山中美恵子（一九九一・一〇）『も』『でも』『さえ』の含意について』『日本語と中国語の対照研究』第十四号（大阪外国語大学）

井島 正博（一九九二・二）「限定表現の多層的分析」『中央大学文学部紀要』第六十九号

沼田 善子（一九九二・五）『セルフマスタースシリーズ5 『も』『だけ』『さえ』など——とりたて——くろしお出版

丹羽 哲也（一九九二・一二）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第四十四卷第十三号（大阪市立大学）

井島 正博（一九九三・三）「条件文の多層的分析」『成蹊大学一般研究報告』第二十六卷

案野 香子（一九九三・一二）「副助詞と文の成分」『語文論叢』第二十一号（千葉大学）

案野 香子 (一九九五・三) 「副助詞の表現性」『千葉大学留学生センター紀要』第一号

定延 利之 (一九九五・五) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 編『日本語の主題

と取り立て』くろしお出版

野田 尚史 (一九九五・五) 「文の階層構造からみた主題ととりたて

益岡隆志・野田尚史・沼田善子 編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

中西久美子 (一九九五・一〇) 「モとマデとサエ・スラー意外性を表

すととりたて助詞」宮島達夫・仁田義雄 編『日本語類義表現の文法 上』くろしお出版

丹羽 哲也 (一九九五・一二) 『さえ』『でも』『だって』について

『人文研究』第四十七巻第七号 (大阪市立大学)

山中美恵子 (一九九六・一二) 『とりたて』と主観性』神戸大学留学

生センター紀要』第三号

井島 正博 (一九九六・三) 「期待の表現機構」『成蹊国文』第二十

九号

井島 正博 (一九九六・三) 「期待表現の体系」『成蹊大学文学部紀

要』第三十一号

蓮沼 昭子 (一九九七・一) 『だつて』と『でも』—取り立てと接続

の相関—『姫路獨協大学外国語学部紀要』第十号

中野 亜美 (一九九七・三) 「意外性」を表す取り立て助詞『も』『ま

で』『さえ』の一考察』『さわらび』第六号

三井 正孝 (一九九七・三) 『現代日本語に於けるとりたて詞サエの

意味』『新潟大学国語国文学会誌』第三十九号

伊藤 智博 (一九九七・三) 『まで』の表現機能に関する一考察』『日

本語・日本文化』第二十三号 (大阪外国語大学)

森山 卓郎 (一九九八・四) 「例示の副助詞『でも』と文末制約」『日

本語科学』第三号

茂木 俊伸 (一九九八・三) 「とりたて詞『まで』『さえ』について—

否定との関わりから—」『日本語と日本文学』第二十八号

(筑波大学)

菊地 康人 (一九九九・一〇) 「サエとデサエ」『日本語科学』第六号

茂木 俊伸 (二〇〇〇・一二) 「順序助詞句『AからBまで』につい

て」『筑波応用言語学研究』第七号

丸山 直子 (二〇〇一・三) 「副助詞『くらい』『だけ』『ばかり』『ま

で』の、いわゆる(程度用法)と(とりたて用法)」『東京

女子大学日本文学』第九十五号

安部 朋世 (二〇〇二・三) 『とりたて』のマデの意味』『鶴見大学

紀要 国語・国文学編』第三十九号

沼田 善子 (二〇〇二・一一) 「とりたて」『日本語の文法2 時・否

定と取り立て』岩波書店

蓮沼 昭子 (二〇〇三・三) 「取り立て詞『だつて』について—『も』

『でも』との比較を通して—」『姫路獨協大学外国語学部

紀要』第十六号

星野 佳之 (二〇〇三・三) 『さえ』の観点について—誤用例の検討

を通じて―『清心語文』第五号（ノートルダム清心女子大学）

菊地 康人（二〇〇三・一一）「現代語の極限のとりたて」沼田善子

・野田尚史 編『日本語のとりたて』くろしお出版

浅田満智子（二〇〇三・一二）「複数の機能を持つ形式『マデ』の意

味分析―マデニ、マデモとの関連から―『麗澤大学紀要』

第七十七号

茂木 俊伸（二〇〇四）『とりたて詞文の解釈と構造』筑波大学博士

学位請求論文

浦志 直昭（二〇〇四・三）『すら』と『さえ』の比較―置き換え可

能な場合と不可能な場合―『東アジア日本語教育・日本

文化研究』第七号

鈴木ひとみ（二〇〇四・一二）『副助詞研究―サエ（サヘ）の用法と

その変遷―』東京大学修士論文

井島 正博（二〇〇五・一一）「その機能と構造 上」『武蔵大学人文学

会誌』第三十六卷第三号

井島 正博（二〇〇五・三）「その機能と構造 下」『成蹊大学文学部

紀要』第四十号

鈴木ひとみ（二〇〇五・三）「副助詞サエ（サヘ）の用法とその変遷」

『日本語学論集』創刊号（東京大学）

（いじま まさひろ 人文社会系研究科 助教授）